奇跡

前山英子

平成の不況はいっこうに回復の兆しがない。すでに定年を二年半後に控えていた。めっきり仕事量の減った会社は再三リストラを行い二度も希望退職者を募った。これには断じて応じなかった。そんな緊迫したある日、上司に呼ばれた。「何も言わんとM営業所へ行ってくれ。詳しくはM所長から指示があるやろ。給料その他は今まで通り出るさかい」ボソッと言うと席を立った。M営業所に事務職の欠員はないはず、とっさに二、三ケ月前に辞めた作業員の賄い婦のことを思い出した。きっとあの女の補充にちがいない……。

思い余って労働組合の幹部に相談。「今は職員や作業員や言うてる場合じゃないんです。お互いに補充し合って、雇用の確保に務めているんですよ。給料が同じで仕事が楽なら、いいじゃないですか。僕なら行きますね」。負うた子に教えられる思いであった。今まで現場の仕事は一段低いものと見なしていた。ざっと事務職三十年のキャリアを持つ私が、よりによって作業員の賄いとは。この不況では辞めることも儘ならない。奇跡がおこって一瞬に、この辞令が撤回されることを祈る日々であった。

そんな明け暮れの中で読んだ一冊の伝記『ヘレンケラーを支えたベル博士』。盲聾唖のハンディを乗り越え大学教育を修めたケラーの若き日も感動的だが、その晩年は更に感動的であった。家族や支援者のすべてを失ったケラーは場末の見せ物小屋で数当てっこをした。そして堂々と、「私はサリバン先生と私の生活の資を稼いでいるのです」と言ったという。その収入は講演料を遙かに上回るものだった。

奇跡はおこらなかったが、ケラーの言葉に強く支えられて慣れない仕事を精いっぱいこなした。作業員らは意外に好意的であった。しかも気兼ねなく休暇を取って、ＪＣＰ、信徒前進修養会、随筆教室ほか教会内外の活動に参加することができた。会社からは毎月三十万円の給料が支給されたのである。